

トマス哲学における 神の把握不可能性 (incomprehensibilitas) について

山本 芳久

序 問題意識

トマスは、人間が神を「把握する (comprehendere)」ことができないということを、二つの異なった文脈で語り分けている。

即ち、まず第一に、「この世 (via)」における人間の神認識の可能性に対して、はっきりとした限界を確定する際に、神の把握不可能性ということ語る。即ち、人間はこの世においては、神の本質を見ることは決してできないのであり、このような事態こそ、人間が神を「把握する」ことができないと言われることの一つの意味に他ならない。この場合の「把握」は、「追求」に対立するものとして¹⁾、掴む (tenere) こと、即ち、既に現前した形で持たれている何らかのものの掴みのことを意味する²⁾。そして天使やキリストや救済された人間などの「至福者」は、この意味において「把握者 (comprehensor)」と言われるのであり、それに対して、現世を歩む「旅する者 (viator)」としての人間は、常に追求者として歩まなければならない³⁾。それ故、この意味の「把握」は、「希望」の対概念として語られるのであり、「把握」が可能になっている場合には「希望」という不完全な在り方は存在しない⁴⁾。

他方、トマスは、天国における至福直観においては、神の本質が見られるという意味で神が把握されることをはっきりと肯定している。だが、それは、神が人間によって完全に認識し尽くされるということの意味するのではない。そして、このような意味においては、神は至福者によっても把握されることができない。これが神の把握不可能性の第二の意味に他ならない。この場合の「把握」は、ものが認識可能である、その限りを尽くして認識されるとの意味である⁵⁾。そして、このような意味においては、神を完全に把握するのは神自身以外にはないとされる。

本発表の意図するところは、このような形でトマスの語っている神の把握不可能性

の二通りの意味の関係を明らかにすることを通して、神の把握不可能性という観点からトマスにおける神認識において果たしていた積極的な役割を明らかにすることである。その際、特に、『神学大全』第一部第十二問題を中心に論究を進めていきたいと思う。

第1章 カール・ラーナーの解釈への批判

ところで、この問題に関しては、カール・ラーナーの「トマス・アクィナスにおける神の把握不可能性について」⁶⁾と題する先行研究が存在している。その論文の中でラーナーは結論的に次のように主張している。

「直視における神の把握不可能性ということは、被造的な知識の有限性の徴として、その到達する限界のようなものとしてのみ理解されてはならない。むしろそれはまさに被造的知識が到達したいものなのである。」⁷⁾

そして、ラーナーは、把握不可能性の二つの意味を場合分けすることなしに、「認識し尽くす」という意味のみでこの言葉を解釈し、至福直観において、神の把握不可能性が把握不可能性として顕わになると共に、希望も希望としてのその真の姿を現わすとの立場から次のように述べている。

「人間本性の成就是、有限な主体が、真理であり愛であるところの神の把握不可能性 (Unbegreiflichkeit) と包摂不可能性 (Unumgreiflichkeit) の中へと自己放棄することである。『希望』という言葉のうちには、神の操作不可能性 (Unverfügbarkeit) へのこの一つの統一的な自己放棄が含意されている。……希望がまさにその姿を現わすのは、操作可能なものが決定的に超越された地点、即ち永遠の生の決定性においてなのである。」⁸⁾

そして、このような観点から、キリスト教の本質を次のように規定する。

「こうなると、キリスト教はどれほど単純なものとなるであろうか。即ち、それは、把握不可能な神へと、委ねる愛において自らを明け渡そうとする心構えであり、また、このことをせず、理解可能なことにしがみついて罪を犯しているのではないか、という怖れである。」⁹⁾

キリスト教の本質に対するこのような理解は、決して誤りとは言えないだろう。だが、トマス理解としては、単純化の誘^そりを免れることはできない。というのも、トマスは、「把握することのできない」神へと開かれた人間精神の力動性を閉ざす可能性として、ラーナーの指摘している「理解可能なものにしがみつくと」という可能性すな

わち有限的な被造物を絶対化するという可能性のみではなく、把握することのできない神の把握できなさに絶望するという可能性をも次のような形で指摘している。

「希望の対象は、困難ではあるが——自ら、あるいは他者を通じて——到達可能な善である。それゆえに、或る人において至福到達への希望が失われることは二つの仕方でも可能である。その一つは至福を困難な善と見なさないがゆえにであり、もう一つはそれが自ら、あるいは他者を通じて到達可能であると見なさないがゆえにである。」¹⁰⁾

そして、あらゆる意味での探求の失敗や迂路にさらされざるを得ない神探求において、我々に必要な「希望」とは、神の「把握不可能性」に対する希望ではありえず、神の何らかの意味での把握可能性への希望であらざるを得ないのであり、トマスは、「把握」の意味の場合分けを通して、神の「把握者」である「至福者」の姿を明らかにし、そのような希望を確実なものとすることに成功している。

即ち、「把握」のトマスの場合分けに即して言うならば、ラーナーは、把握者における神の把握不可能性ということを非常に強調してその積極的な意味を汲み取ろうとしている。それに対して、トマスは、把握不可能性の只中でも人間は神と何らかの仕方でも結び付くことができるのだという「掴む (tenere)」という意味での comprehensio の方向をより強調しているのであり¹¹⁾、理解し尽くすことができないという意味での把握不可能性は、あくまでもその副産物として位置付けていたに過ぎないのではないかと思われるのである。そのような観点から、以下において、トマスにおける神の把握不可能性の意味について探求していきたいと思う。

第2章 自然的理性による神認識の限界

トマスは、人間が神の本質をこの世で見ることができないこと——即ち神を把握することができないこと——の理由を次のように説明する。即ち、認識されるものは認識者の内に、認識者の在り方に従って存在するのであるが、神は認識者である被造的知性の在り方を無限に超え出ている対比を絶している¹²⁾。「被造の実体の（有限的な）様態に基づいたどのような認識も、あらゆる被造の実体を無限に超越している神の本質を観ることまでには及び得ない」¹³⁾のである。人間の自然本性的な認識は、感覚にその端緒を取るものであり、可感的被造物によって導かれるところまでしか及び得ない故に、神の全能力を認識することまで導かれることはできず、それゆえ本質を観るこ

ともできないのである。

そもそも、認識するということは、認識されるものが何らかの仕方でも認識するものの中に存在することによって実現する。それ故、認識するという行為の卓越性は、認識者が、自己に自然本性的に備わっている形相以外の他の事物の形相をも所有しうるというところにある。しかも、認識されたものは、他の所有物のような失われうる仕方でも所有されるのではなく、認識者の存在に刻まれるような形で所有される¹⁴⁾。即ち、感覚を通して人間知性は他の事物の類似性 (similitudo) であるところの形象 (species) によっていわば刻み付けられる。知性は事物の類似性を自らの内に引き入れ、自己を現実化する。これは、他者を自己に同化することによって自己を豊かにしていく態度である。知性は、非質料的であることによって、そのような同化の力を持ちうる。

だが、神は、「被造知性によって表示され理解されうるすべてのものを卓越した仕方でも自らの内に包含している、包み込むことのできない何ものか」¹⁵⁾なのであるから、どのような被造の形象によっても表現し尽くされることができない。被造物は原因である神を何らかの形で表現しているものの、神の本質を表現するには不完全である。それ故、類似性を媒介にして神の本質が見られることは不可能である。だから、人間知性は、神を自らに同化するようなことは決してできない。それ故、我々は現世において神の本質を見ることはできない。そして、現世を歩む人間に許されている神認識は次のように規定される。

「我々は神について、神の被造物に対する関係、即ち万物の原因であるという関係を認識するとともに、また被造物と神との相違、即ち神は神によって原因されたもののいずれでもないこと、またそれらが神から除かれるのは、神の欠陥によるのではなく、かえって神がそれらを超越しているからであるということを確認する。」¹⁶⁾

第3章 神の把握可能性と把握不可能性

それでは、神の本質を直視すること即ち神を把握すること、そしてまさにその把握の只中における認識し尽くすという意味における把握の不可能性ということをもトマスはどのような形で考えているのだろうか。本章においては、第十二問題の論述を辿ることによってそのことを明らかにしてみたいと思う。

まず第一項においては、「いかなる被造知性も神の本質を見ることはできない」という一部の神学者の見解が、信仰にも理性にも反するという観点から否定され、至福者が神の本質を直視することが肯定される。そして第二項から第五項までにおいて、神の本質は自然的理性の光のみで見られることはできず、「恩寵の光 (lumen gratiae)」や「栄光の光 (lumen gloriae)」によって知性が強められる必要があるということが語られる。「被造知性は、神がその恩寵によって御自身を被造知性に結合して (se intellectui creato coniungit) 被造知性によって認識されうるものとしないう限り、神を本質によって見ることはできない」¹⁷⁾のである。そして「この光によって彼ら〔至福者〕は、神の形の者 (deiformes)、即ち神に似た者 (Deo similes) となる」¹⁸⁾とまで言われて「神化」とも言うべき観点が導入される¹⁹⁾。

更に、第六項においては、「栄光の光をより多く分有する知性ほど、より完全に神を見るであろう」²⁰⁾という形で至福者たちの階層秩序が示され、神直視が極めて高度の段階に及びることが示される。

そしてまさにその直後に、第七項「神を本質によって見る者は神を把握するか」²¹⁾において、認識し尽くすという意味での把握の可能性が完全に否定される。即ち、人間が神の存在の分有によって神の形の者となって至福になるとはいつても、だからといって「被造物が神の本性を持つなどということはあり得ない」²²⁾のであり、知性的被造物の自然本性の完成とは単なる自然本性を超えていくことではあるが、その頂点においても、自然本性が克服されて神になってしまうのではなく、あくまでも被造物としての完成だということを強調するために、第七項において神の把握不可能性ということが改めて強調されている²³⁾。その具体的な説明は以下の通りである。

「無限の存在を有する神は、無限に認識可能 (cognoscibilis) である。だがいかなる被造知性も、神を無限に認識することはできない。そもそも被造知性は、注がれた栄光の光の大小に応じて、神の本質を、大なり小なりの完全性をもって認識する。しかしながら被造的栄光の光は、いかなる被造知性に受け取られたものであっても、無限ではありえないから、いかなる被造知性といえども、神を無限に認識することはできない。それゆえ神を把握することは不可能なのである。」²⁴⁾

上述のことから明らかのように、トマスは、人間の最終的な完全性である至福の内実を、神が把握可能なのか把握不可能なのかという狭義の認識論的な問題設定の枠組

のみで考えてはいなかった。そしてラーナーの解釈に欠けていたのはまさにこのような視点である。彼は次のように述べている。

「神の把握不可能性の問題において、トマスは繰り返し光の形而上学を導入する。……しかし私が思うには、神の把握不可能性に関するトマスの教えを理解するに際しては、この光の形而上学は実質的な損失なしに無視することができる。……我々はそれが意味するものをもっとトマスの存在論または存在論的神学において表現すべく努める。」²⁵⁾

だが、むしろ問題は逆なのではないか。トマスの全体的な問題設定をラーナーは逸してしまっているのではないか。というのも、トマスは、少なくともこの第十二問題においては、むしろ、ラーナーの名付けるところの「光の形而上学」の展開において、その一つの派生的問題として「神の把握不可能性」という問題を導入しているのである。

第十二問題が語っているのは、神認識の場合には人間が対象である神を自らの見慣れた親しみのある世界の中に位置づけるのではなく、人間の方が徹底的な自己超越を通して「存在そのもの」である神へと脱自していくということであり、そしてそのようなことが可能になるのは神の側の恩寵による受容に基づいているということである²⁶⁾。自らの認識様態に人間が最後まで束縛されつつもその認識が神に届かないわけではないということが肯定されているのも、神の側の受容ということが根拠になっているのである²⁷⁾。

しかも、その「受容」ということは「恩寵」といった特別な愛に基づくのみではなく、そもそも人間が神を起源とした自然本性的存在を有し、自然的理性によって目的としても神へと向けられているということ自体が、神の受容に基づいている。というのも、トマスは、自然の領域があってその奥に恩寵の領域があるといった二層構造で考えているのではない。トマスにおける創造論的な世界理解においては、自然的理性による神認識と恩寵による神認識との関係は、時間的な前後関係や二層構造的な階層的關係にあるものとして考えられてはいない。というのも、そもそも知性的被造物がその自然的能力を備えて存在しているということ自体、存在賦与という神の愛に基づいているのであり、それはそれ自体、「恩寵」という神学的概念で呼ばれていないにしても、恵みに他ならないだろうからである。トマスは次のように述べている。

「被造物に対する神の愛にも相違のあることが見て取られる。即ち、その一つは

……共通的な愛 (*dilectio communis*) であり、この愛に基づいて諸々の被造的
事物に自然本性的存在が与えられる。」²⁸⁾

そして、

「神によって存在するものは、それが存在するものである限りにおいて、全存在
の第一の普遍的根源である神に似ている。」²⁹⁾

それ故、「恩寵の光」や「栄光の光」による神の側の受容によって可能になる認識
は、確かに人間の自然本性を超えているのではあるが、自然本性に反するどころか、
むしろ、自然本性自体に内在している究極的な可能性を初めて現実化するものでもあ
る。というのも、「理性の自然本性的光そのものが、神の光の一種の分有である」³⁰⁾
からである³¹⁾。

それ故、被造知性が神の本質を観ることを可能にする根拠として語られている神の
「恩寵」というものは、被造知性を自らにとって本性的な認識様態への自閉から何ら
かの形で解放する働きとして、しかも、だからといって被造知性の認識様態を排除す
るのではなくむしろそれをその認識様態に基づいて完成する働きとして、語り出され
ているのである³²⁾。これは言い換えれば、他者である神を親しい他者として受け入れ
ながらしかも私の自分らしさが失われないどころか、むしろそれまでにない輝きを帯
びて立ち現れるという事態であり、我々は、これと類比的な事態を、神認識とは別の
局面においても実際に経験している。それは他者への「愛」という態度に他ならない。

「希望が前提としている愛とは、或る人が自ら手に入れたいと希望するものに対
する愛であって、それは欲情的な愛 (*amor concupiscentiae*) である——何らか
の善いものを欲する者は、この愛によって、何か自分以外のものよりも、むしろ
自分をより愛するのである。しかるに、愛徳 (*caritas*) は友愛的な愛 (*amor
amicitiae*) を意味するのであって、……人は希望によってこの愛へとたどりつ
くのである。」³³⁾

希望の中にある「旅する者」から「神の本質を観る」「把握者」への移行とは、「欲
情的な愛」から「友愛的な愛」への移行に他ならない。トマスは、第十二問題におい
て、「希望」を現実化しつつ克服した「至福者」について語ることによって、「旅する
者」における「希望」という在り方を基礎付けつつ、それを超える愛という在り方を
も語り明かしているのである。トマスにおいては、希望の役割に制限が与えられるこ
とによって、却って、そのような希望を担っている現世の人間の神との関係が、ラー

ナーにおけるよりもより具体化された積極的な方向を持ち得ていると言えるだろう。だからこそ、トマスは、一見無機的な第十二問題の論述の中で、突然、溢れ出すような仕方次第のように語り出しているのである。即ち、

「より多く愛徳 (caritas) を有する者ほど、より多く栄光の光を分有するであろう。より大きな愛徳のあるところ、そこにはより大きな熱望が存在し、熱望は何らかの仕方次第で熱望者をして、熱望されているものを受容するに相応しくかつ準備された者とするからである。それゆえ、より多く愛徳を有する者ほど、より完全に神を見て、より一層至福なる者となるであろう。」³⁴⁾

第4章 至福者の認識様態

こうして、神認識においては、「知」の方向性が、他者である神を人間が自己の認識様態へと同化するという方向から、自己自身が神へと類似化しつつそのことによって「神の知」へと参与していくという方向へと転換する。そしてそのことは、神の本質を直視している至福者の認識様態を分析することによってより明らかになる。

即ち、トマスは、把握者による神の把握不可能性を第七項で明らかにした後、第八項「神を本質によって見る者はすべてを神において見るか」においては、至福者たちは被造物を単にそれ自体として見るのではなく、神の結果である被造物が原因である神の内に潜勢的に (virtute) あるような仕方で見ると述べる。そして次に第九項「神の本質を見る者たちが神において見る事柄は何らかの類似性によって見られるか」と第十項「神を本質によって見る者は神において見るすべてのものを同時に見るか」においては、至福者たちは、見るそれぞれのものをそれぞれのものの類似性によって見るのではなく、「神の一つの本質によって」³⁵⁾ 同時に見るのだと述べている。それは、世界を人間の眼で見るとのみではなく、何らかの形で神の観点から見うるような視点が被造的知性の知に与えられるということである。神の本質が直視されるということは、神という一対象が認識されることを意味するのみではない。純粹現実態である「神の知」に人間が参与することを通して、この世における通常的人間的認識においては断片的な形で多様性の中に拡散したままに認識されるに留まっている世界的な事物の総体を、「被造物全体」として全体的に理解するための道が開かれうるのである。

だが、だからといって、至福者たちは、被造物のすべてを認識するわけではない。

トマスは次のように述べている。

「原因を全体的に把握している知性は、その原因において、原因のすべての結果と、結果のすべての根拠とを認識することができる。ところがいかなる被造知性も、神を全体的に把握することはできない。故にいかなる被造知性も、神を見ることによって、神がつくり、またつくりうるすべてを認識することはできない。というのも、そうなると神の力を把握することになってしまうだろうからである。」³⁶⁾

このテキストにおいても、至福者における、現世の人間の認識様態との方向性の逆転が語られている。というのも、現世の人間が神を直視することができないのは、結果である可感的被造物が原因である神へと十分に導く力がないからであった。それに対して、至福者においては、原因である神を全体的に把握することができないから、その結果である被造物のすべてを認識することはできないと言われているのである。それ故、神の本質へと参入した至福者＝把握者においてこそ初めてありありと露わとなる神の把握不可能性というものがあることになる。そして、その神の把握不可能性は、被造物全体の把握不可能性へと反照すると言われているのである。

第5章 神の把握不可能性の意味するもの

こうして、神の把握不可能性は、神だけの問題に留まるのではなく、神を「起源と目的 (principium et finis)」³⁷⁾とする被造物の把握不可能性へと反照してくる。即ち、人間が、根拠である神に対して自己相対化しつつ問いの運動を遂行する時には、我々の周りに既に存在していた感覚的世界が新たな形で秩序付けられて根源への問いに開かれてきて、そのような根源からの光の中で考察されるようになる。そのことを、『神学大全』の主題について論じているトマスの次のテキストは意味している。

「聖なる教えにおいては、すべての事柄が神を根拠として (sub ratione Dei) 論じられる。即ちそれが神そのものであること、あるいは、起源ないし目的としての神に秩序付けられていることを根拠として論じられる。」³⁸⁾

このテキストは世界の可知性が照らし出される光源の転換を語っている。そしてそのような光源の転換は、神の側から世界全体の構造を理解し語り出す可能性を人間に与える。というのも、それぞれのものの存在を神から与えられているものとして受け取り直すことによって、それらの存在者は単なる欲求対象に尽きないより深い奥行き

を持ったものとして我々に現存してきうるからである。そして、このようにして、トマスにおいては、「希望」というものも、把握不可能な神への自己放棄というようなラーナー的な方向のみではなく、神を中心とした実在全体への知と愛の深まりという方向性をも持っていたのである。

そして、至福者においてさえも、認識し尽くすという意味で神を把握することは不可能であるということが、現在の生において認識されることによって、我々は、神の把握不可能性という点において至福者との共通性を獲得する。そして、その時、至福者における神の把握不可能性ということの意味も転換する。即ち、至福であるにも関わらず神を完全には把握していないのだという消極的な理解のみではなく、至福直観においてこそ、神の把握不可能性とその神を「起源と目的」とした被造物全体そして我々自身の把握不可能な奥行きが初めて完全な意味で露わとなるのであり³⁹⁾、その時、「把握不可能性」の意味するものは、単なる否定的な認識なのではなく、むしろ、あらゆる肯定的な認識によっても汲み尽くされない程に神を中心とした実在全体が存在の充満を有しているということがはっきりと露わになる。無限である神が有限である被造知性によっては把握不可能であるということは現世における自然理性的認識によっても十分に概念的に認識されうることではあるが、それはあくまでも概念的認識である限りにおいて、神の遠さという意識を促し、我々に絶望を与える可能性をも有している。だが、神を掴んでいる「至福者」においては、神の把握不可能性ということが愛を伴った親しきにおいて掴まれることによって、把握不可能なほどの豊かさとして肯定的に受け取られるのである⁴⁰⁾。

トマスは『神学大全』第一部第一問題において、この書物で展開される「聖なる教え (sacra doctrina)」の原理は「神の知」であり、「神の知」への参与として人間の神に関する知が成り立つと述べている。そしてこのことは広く知られている。だが、より厳密にテキストを読むと、トマスは、この原理のことを単に「神の知」ではなく「神と至福者たちの知 (scientia Dei et beatorum)」と言っている⁴¹⁾。しかし、以後第十一問題に至るまで、「至福者たちの知」については何も言われていない。そして、管見に入る限りにおいては、この「至福者たちの知」に特別に注目したトマス研究は殆ど見受けられない。

だが、私見によると、トマスは、第十二問題において、「至福者たちの知」について、さりげなくだがはっきりと論じているのであり、それと対照させることによって、

旅する者である現世の人間の知の及びうる射程の広がりと限界を明らかにすると共に、それを越えた希望を具体化してもいるのであり、その意味で、「至福者たちの知」に、「旅する者の知」の原理の役割を与えることに成功している。そして、それは具体的には、人間の知識の方向性の転換という形で語られているのである⁴²⁾。

結論 「把握」の場合分けの持っている意味

トマスは、「把握」を広狭二つの意味内容へと分節化して、「把握者」の存在様態を確固とした仕方でも語り出して「旅する者」の希望を基礎付けると共に、そのことによって却って「認識し尽くす」という意味での「把握」の可能性をはっきりと否定することに成功している。そしてこのような仕方でも、単純な不可知論と実在全体に関する絶対知の獲得という両極から人間精神を解放して、人間理性の単なる相関者としてではなく、神を神として理解する可能性を根拠づけている。

そして、人間の無限の受容可能性と自然本性的能力によるその実現の不可能性のギャップという形で、「存在そのもの」である神の側からの関与が暗示されることによって、人間の自己超越的な本性が「存在そのもの」に与りゆくプロセスが、人間に固有な自然本性の運動自体の力によって実現しつつ、そのような運動の実現に神の側からの働きかけが不即不離の仕方でも関与していることを語り出すことを可能にしている。

そして、そのことによって、旅する者の自然的認識と至福者における神認識の中間に存する旅する者における恩寵による神認識の構造、即ち信仰・希望・愛という「対神徳」や「恩寵」の積極的な意味、が探求される根本的な地平が拓かれているのであるが、その具体的な詳細に関しては、次稿に譲りたいと思う。

註

- 1) I, 12, 7, ad1.; *comprehensio dicitur dupliciter..... Alio modo comprehensio largius sumitur, secundum quod comprehensio insecutioni opponitur. Qui enim attingit aliquem, quando iam tenet ipsum, comprehendere eum dicitur. Et sic Deus comprehenditur a beatis, secundum illud Cant. 3, [4] : tenui eum, nec dimittam.* なお、特に断りのない限り、本稿における引用は『神学大全 (*Summa Theologiae*)』からとする。そして、『神学大全』からの引用の略号に関しては、慣例に従って、「問題」「項」には特に記号を用いずに、I,1, 2, ad1. のように表記したが、それは、第一部第一問題第二項異論解答 1 を意味している。

- 2) I-II, 4, 3, ad1.; alio modo comprehensio nihil aliud nominat quam tentionem alicuius rei iam praesentialiter habitae.
- 3) cf. I, 62, 9 sed contra.; angeli non sunt viatores, sed comprehensores. Ergo angeli beati non possunt mereri, nec in beatitudine proficere.
- 4) cf. III, 11, 2, ad2.; licet anima Christi fuerit eiusdem naturae cum animabus nostris, habuit tamen aliquem statum quem animae nostrae non habent nunc in re, sed solum in spe, scilicet statum comprehensionis.
- 5) II-II, 28, 3 ad3.; comprehensio importat plenitudinem cognitionis ex parte rei cognitae, ut scilicet tantum cognoscatur res quantum cognosci potest.
- 6) Karl Rahner, "Thomas Aquinas on the Incomprehensibility of God," *The Journal of Religion*, 58 (Supplement 1978), pp. 107-25. なお、この論文にはドイツ語版 ("Fragen zur Unbegreiflichkeit Gottes nach Thomas von Aquin", *Schriften zur Theologie*, X II, S. 306-319.) も存在しているが、本稿においては、この問題の現代的な意味にまで踏み込んでいるより包括的な英語版を中心に扱うこととしたい。
- 7) Karl Rahner, "Thomas Aquinas on the Incomprehensibility of God," p. 122.
- 8) Karl Rahner, "Zur Theologie der Hoffnung," in *Schriften zur Theologie* VIII, S. 569.
- 9) Karl Rahner, "Thomas Aquinas on the Incomprehensibility of God," p. 125.
- 10) II-II, 20, 4.
- 11) cf. I, 12, 13 ad1.; in hac vita non cognoscamus de Deo quid est, et sic ei quasi ignoto coniungamur. (「現世においては、神についてその〈何であるか〉を認識することはなく、いわば〈知られざるもの〉としての神に結び付けられる。」)
- 12) I, 12, 4.
- 13) I-II, 5, 5.
- 14) cf. *De Ver.*, 2, 2.; in III de Anima dicitur, anima esse quodammodo omnia, quia nata est omnia cognoscere.……Unde haec est ultima perfectio ad quam anima potest pervenire, secundum Philosophos, ut in ea describatur totus ordo universi, et causarum eius; in quo etiam finem ultimum hominis posuerunt, quod secundum nos, erit in visione Dei, quia secundum Gregorium, quid est quod non videant qui videntem omnia vident? (『靈魂論』第三巻において、『魂は或る意味ですべてのものである』と言われている。なぜならば、靈魂はすべてのものを認識するべく生れついているからである。……それゆえ、哲学者によると、次のようなことが、魂の到達することのできる究極的な完全性である。即ち、宇宙とその諸原因の全秩序が靈魂に書き記される、ということである。そして哲学者は、そこに人間の究極目的を指定したのであるが、私達に言わせれば、それは神の直視にある。というのも、グレゴリウスが言っているように、『すべてを見たまう者〔神〕を見る者、その者

の眼に入らないものがあるか?』)。なお、〔 〕内は、本稿著者による挿入である。以下同様。

- 15) I, 12, 3.
- 16) I, 12, 12.
- 17) I, 12, 4.
- 18) I, 12, 5.; secundum hoc lumen efficiuntur deiformes, idest Deo similes.
- 19) Cajetanus, *Commentaria in Summa Theologiae*, I, q. 12, a. 2.; Oportet enim videntem Deum esse Deum quodammodo, divinaeque naturae consortem. Constitutum autem intellectus creati in esse divino, est ipsum gloriae lumen.
- 20) I, 12, 6.
- 21) Utrum videntes Deum per essentiam ipsum comprehendant.
- 22) I, 12, 5, ad3.
- 23) トマスは、「神が人間となり給うたが、それは人間が神になるためであった (Factus est Deus homo, ut homo fieret Deus.)」という *Sermo de Nativitate Domini* (Serm. 128, ML 39, 1997) におけるアウグスティヌスの言葉を、「神性への十分な参与 (plena participatio divinitatis)」と解している。(III, 1, 2.)
- 24) I, 12, 7.
- 25) Karl Rahner, “Thomas Aquinas on the Incomprehensibility of God,” pp. 109–110.
- 26) それゆえ、トマスにおいては、神の人間に対する超越性・外部性は、究極的には、単なる認識論的な外部性として捉えられているのではなく、むしろ、いわば自由な主体同士の関係の外部性として捉えられていると言える。
- 27) cf. I-II, 26, 3, ad4.; Magis autem homo in Deum tendere potest per amorem, passive quodammodo ab ipso Deo attractus, quam ad hoc eum propria ratio ducere possit, quod pertinet ad rationem dilectionis, ut dictum est. Et propter hoc, divinius est amor quam dilectio.
- 28) I-II, 110, 1.
- 29) I, 4, 3.
- 30) I, 12, 11, ad3.
- 31) cf. I, 84, 5.
- 32) cf. I, 62, 5.; gratia perficit naturam secundum modum naturae.
- 33) I-II, 66, 6, ad2.
- 34) I, 12, 6.
- 35) I, 12, 10.
- 36) I, 12, 8.
- 37) I, 1, 7.

38) *ibid.*

39) I, 56, 1, ad1.; *angeli non perfecte cognoscunt suam virtutem, secundum quod procedit ab ordine divinae sapientiae, quae est angelis incomprehensibilis.* (「天使たちにとっては把握不可能である神の知恵の秩序から発出する限りにおいては、天使たちは自分自身の力を十分に認識することはない。」)

40) I, 107, 3.; *angelus loquitur Deo, vel consultando divinam voluntatem de agendis; vel eius excellentiam, quam nunquam comprehendit, admirando;* (「天使は、為すべき事柄について神の意志に相談することによって、あるいは、決して把握し尽くすことのない神の卓越性を讃嘆することによって、神に語る。」)

41) I, 1, 2.

42) 把握者においてこそ露わとなる神の把握不可能性、そしてその把握不可能な豊かさの被造的な知識への浸透ということは、「同時に旅する者であり把握者でもあった」キリストの知識を検討することによってより具体的に明らかとなると思われる。というのも、キリストの内に神的な知識の他に人間的な知識があれば、人間的な知識は^{かす}覆まされてしまうのではないかという異論に対して、トマスは次のような仕方で答えている。

「もしも二つの光が同一の階層の内にあるとするならば、より弱い光はより強い光によって覆い隠されてしまうのであり、それは太陽の光がロウソクの光を覆い隠してしまうようなものである。だが、より強い光が照らすものの階層の内に入りより弱い光が照らされるものの階層の内にあるとするならば、より弱い光はより強い光によって覆い隠されるのではなく、むしろ強められるのであり、それは空気の光が太陽の光によって強められるようなものである。そしてこのような仕方でキリストの魂における知識の光は、神的な知識の光—『ヨハネ福音書』1:9で言われているように、それはこの世に来るすべての人を照らす真の光である—によって覆い隠されるのではなく、より明るいものとなったのである。」(III, 9, 1 ad2.; *Si duo lumina accipiantur eiusdem ordinis, minus offuscatur per maius, sicut lumen solis offuscat lumen candelaе, quorum utrumque accipitur in ordine illuminantis. Sed si accipiat maius in ordine illuminantis et minus in ordine illuminati, minus lumen non offuscatur per maius, sed magis augetur, sicut lumen aeris per lumen solis. Et hoc modo lumen scientiae non offuscatur, sed clarescit in anima Christi per lumen scientiae divinae, quae est lux vera illuminans omnem hominem venientem in hunc mundum, ut dicitur Ioan. 1, 9.*)

* 本論は、日本学術振興会特別研究員 (DC2) としての研究成果の一部である。